

○ 病虫害防除法（花き共通）

1 花き共通

（1）環境と調和した防除の基本的考え方

切り花や鉢物生産では品目・品種が多様化し、周年栽培体系が定着している。さらに、品質が重要視されることから農薬を多用する場合が多く、環境に対する負荷や使用者に対する安全性が問われている。

これらの背景を踏まえ、今後は化学農薬のみに依存しない防除体系を構築していく必要がある。そのためには、発生予察情報を活用し、病虫害の発消長を捉えた的確な防除を実施し、生物的防除法や物理的防除法等、環境に配慮した多様な防除技術を活用して化学農薬の節減を図るとともに、使用者に対する安全対策を講じていくことが肝要である。

そこで、次の事項について重点的な推進を行う。

防除にあたっては、ほ場周辺の環境整備や防虫網等による害虫の侵入防止対策を実施し、環境負荷の小さいB T剤やI G R剤等を選定するように努める。

ア 機械的除草技術

機械的手法による除草を行う。

イ 生物的農薬利用技術

拮抗微生物等を利用した防除体系の導入を考慮する。

B T剤は桑園や蚕室の近くでは使用しない。

ウ 対抗植物利用技術

線虫の主な対抗植物としては、マリーゴールド、ラッカセイ等があるが、線虫の種類に合わせて対抗植物を選定する。

エ 被覆栽培技術

防虫網による害虫の侵入防止、紫外線除去フィルム被覆によるアザミウマ等の侵入を防止する。

オ フェロモン剤利用技術

フェロモントラップによる発消長の調査による防除適期の予測や性フェロモン剤の設置による交信攪乱を行う。

カ マルチ栽培技術

光反射マルチの使用によるアザミウマ、アブラムシ等を忌避する。

キ 黄色蛍光灯利用技術

黄色蛍光灯によるチョウ目害虫の侵入を防止する。

ク その他環境にやさしい防除技術

作式改善やハウス管理など耕種的防除を実践する。

（2）化学的防除法の共通的な注意事項

ア 合成ピレスロイド剤等や蚕毒の強い剤は、桑園や蚕室の近くでは使用しない。

イ 合成ピレスロイド剤は、魚毒の恐れのあるところでは使用しない。

(3) 施設における省力防除法

ア くん煙剤, 蒸散剤, くん蒸剤

a 自燃式くん煙剤 (点火芯・点火紙などに着火して, 薬剤自体が燃える)

b 蒸散式くん煙剤 (蒸散器で使用する)

※ 使用上の注意事項

- (1) 夕方気温が上がらなくなってからハウスを密閉して処理し, 翌朝開放する。
- (2) くん煙中は入室しない。また翌日も十分換気した後に入室する。
- (3) 通常のハウスは, 高さ 2 m としてハウス容積を算出し, 薬量を決める。
- (4) くん煙剤は薬剤散布の省力化あるいはハウス内が多湿になる場合などで利用価値が高いが, 効果不足となる場合もあるので, 薬剤散布と組み合わせて利用する。
- (5) 薬剤により, 使用方法・量などが異なるので, 使用方法や注意事項をよく読んで使用する。